

## 「永井隆博士」

2018年20月22日

キリスト教の月刊誌『福音と世界』3月号は「キリスト教と犠牲のシステム」を特集している。その中に、長崎外国語大学外国語学部教授の小西哲郎氏が「長崎原爆と殉教」と題して、永井博士（以下＝博士）の実像について寄稿している。

長崎医科大学の助教だった博士は放射線科の医師であり、職業柄放射能を大量に浴びて、余命3年の診断を受けていた。原爆が投下された時、爆心地から700メートルの診察室で被爆し重傷を負った。妻は爆死、2人の子どもは疎開しており無事であった。博士は、被爆後、生き残った医局員を集めて、被爆者の救護活動に当たった。その活動内容を『原子爆弾救護報告』として長崎医大に報告している。長崎医大教授に昇進するも白血病が悪化し、以降は病床での執筆活動に専念した。原爆体験記『長崎の鐘』はベストセラーになり、歌や映画にもなった。その後も、多くの作品を出し、印税を地域の復興のために寄付した。「原子野の聖人」と称えられ、様々な表彰を受け、没後も、博士を記念する「平和賞」や「ヒバクシャ医療センター」などが設立された。「偉人」という扱いを受けた。

博士の働きは当然称賛されるが、小西氏は、博士の実像について3点を報告している。陸軍軍医・中将だった博士は、長崎医大に軍服姿で現れ、腰に剣を差して、ふんぞり返って闊歩する「大日本帝国臣民」という言葉にふさわしい人物であった。軍人勅諭の暗誦を強要し、覚え切れない学生には、噛みつかんばかりの形相で、「貴様—それでも皇国日本の国民か。ハラ切って死んでしまえ」と罵倒したという証言が残されている。二つ目は、「核の平和利用」推進論者であったことである。小西氏は、博士が称賛されたのは、被爆者救済や復興に尽力したことだけではなく、被爆者でありながら、国策である核エネルギーの利用を提唱したことが大きかったと書いている。『長崎の鐘』のタイトルは、もともと『原子時代の開幕—医学者の体験した原子爆弾』で、下記のように述懐している。（核を）「善用すれば人類文明の飛躍的進歩となり、悪用すれば地球を破壊せしめる。いずれも極めて容易簡単な仕事である。そして右にするか左をとるか、これまた簡単に人類の自由意思にまかせられてある。人類は今や自ら獲得した原子力を所有することによって、自らの運命の存滅の鍵を所持することになったのだ。」博士の手紙には楽観的な「原子力礼讃」の言葉があり、「平和利用」が望みであった。上記の2点については、博士も時代の価値観から抜けきれなかったことの証左ではないか。国粹主義に埋没することは、十分あり得ることである。そして、核の平和利用については、福島原発事故を経験しても、科学で核に対処できると主張する科学者は沢山いる。

三点目が、信仰に関することで、極めて興味深い。博士は、原爆投下をキリシタン迫害・殉教の伝統に連なるものと考えて、受け入れ、更に美化しようとした。キリシタンの聖地・浦上に投下されたのは「神の摂理」であり、爆死者たちは燔祭（焼き尽くすささげ物）の汚れなき小羊である。この犠牲によって、神が祈りを聞かれ、世界に平和をもたらす。米国が泣いて喜ぶ理解ではないか。長崎大学名誉教授の高橋眞司氏は、博士の信仰理解を「浦上燔祭説」と名付けている。「被爆死者合同慰霊祭」で、頭に包帯を巻き、ボロ衣をまとった博士は「浦上燔祭説」を公にし、聴衆は感涙にむせび泣いたという。博士の信仰に立った弔辞であったが、これは受け入れられない。日本の敗戦は時間の問題であったのに、原爆投下はソビエトに先んじるための米国の政治的な選択であった。犠牲者を美化することは、権力者たちを喜ばせるだけであることを、しかと知るべきである。